

# 伊勢・おはらい町 おかげ参りに相応しい界隈性の創生

日本の伝統文化「型」にこだわる和風のまちづくり

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

## 1. まちを素通りする観光客 近代化する街並み

「おはらい町」は、伊勢神宮・内宮の門前に五十鈴川と平行する延長約 800m の通りに沿って形成された町である。伊勢神宮は、民族の総氏神として天皇家の祖神・天照大御神を祀る神宮で、全国に 8 万 8 千を超える神社（コンビニ店舗は 5 万超）がある中、この地は日本人なら一生に一度はお参りしたいと願う場所である。江戸時代は、この町に住む「御師」と呼ばれる人達が、全国に散らばり熱心に客を集めて回り、参宮した人々には、おはらいや神楽で厚くもてなした。

この地を訪れた人々は、皆これまで無事に人生が送れてきたことを、「おかげ様」といって祖先に感謝申し上げたという。伊勢の旅は、道中が長く費用もかさむことから（いまでいう海外旅行に似ている）、「講」をつくり近所の人達で資金を出しあい、旅立つ人を支援した。

ところが、このおはらい町、明治を経て大正・昭和に入ると次第に様相が異なってくる。1970 年代後半、伊勢神宮の参拝客が 500 万人を数える中、おはらい町の観光客数はわずか 20 万人にまで激減してしまう。それは門前のこの町が近代的な建物に変わるのと歩調を合わせるように、参拝客の足が志摩や熊野、白浜などに伸びていったからである。門前の商店の中には、シャッターを閉め廃業するものも散見されるようになってきた。



位置



おはらい町（右下が伊勢神宮、中央がおかげ横丁）



老舗・赤福本店

「地方創生」支援プロジェクト



## 2. 門前に相応しい和風のまちなみ創出 心のふるさと、伊勢らしさ

この地に 300 年以上続く**老舗の商家・赤福**（五十鈴川に架かる新橋のたもとにある和菓子店で、看板商品は赤福餅。）の社長・濱田益嗣は、この状況に危機感をもち往時のお伊勢参りの賑わいを取り戻そうと、1979 年（昭和 54 年）、自らが中心となって有志を募り「内宮門前町再開発会議」を結成する。濱田氏は仲間と語り低迷の原因を探る。そうして出した結論は、「**お客様は日本的な心のふるさとを、この地には「伊勢らしさ」を求めている。**」であった。委員会では早速、現状を打開するべく、和風のまちなみへの転換の重要性を皆に呼び掛けるとともに、伊勢神宮門前町に相応しい景観の整備を市に**要望**（1982 年）、議会には**請願**（1986 年）を行う。

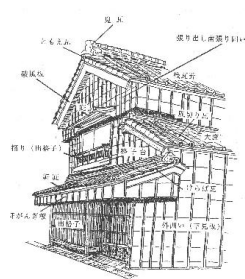
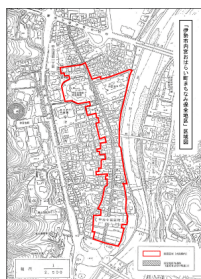
### （1）おはらい町の景観形成 まちなみ保全条例で規制誘導、基金設立し低利融資で促進

会議発足から 10 年がたった 1989 年（平成元年）、地元伊勢市でも**伊勢らしい和風のまちなみ**形成を促進しようと、町人の思いを汲んで、「**まちなみ保全条例**」を制定する。また、これにあわせ沿道地区では建築協定を締結、また赤福からの多額の**寄付**（約 5 億円）をうけ創設された、「**まちなみ保全事業基金**」を活用し景観まちづくりを進めていく。

具体には、1990 年に市が**保全地区**（おはらい町通り約 580m、対象 56 件、140 棟）を指定し、**保全計画**（整備基準含む）を策定、これに基づいて**伊勢造**（切妻ないし入母屋造の妻入り）と称する**伝統様式(型)**で建築を行う者に、基金を活用し**低利融資**（100～3,000 万円、2%、20 年）を開始する。まちなみの修景には、民間建物だけでなく郵便局や銀行の支店など**公共的建築物**も協力、また三重県や伊勢市もこれと**連携**し、**電線の地中化**（1992 年）や**路面の石畳化**（1993 年）を進め、この地に相応しい界隈性の創生に協力する。

#### ■整備基準の概要

外壁は、杉の赤味板を張り付けた外囲い（ささらこ下見板張り）でおおい、煤と魚の油で練った「ぬれガラス」と呼ばれる防腐塗料で黒く塗るとともに、屋根は伊勢特有の「伊勢瓦」で葺き、二階部分は「張り出し南張り」と呼ばれる外囲いを設置する。また、一階の軒庇の先端には「軒がんぎ板」という垂木の鼻隠しをすえ、まちなみに連続性を持たせる。



まちなみ保全地区 建築ファサードデザイン例

銀行も和風デザインに

おかげ横丁

「地方創生」支援プロジェクト



## (2) テーマタウン「おかげ横丁」の建設 先導的モデル事業

おはらい町通りのまちなみの修景を進めるには、行政の協力・支援はもちろんのこと、地元関係者との協働が必要で、まずは道標(整備イメージ)となる「お手本」を示す必要があった。そこで、(株)赤福は、この地にまちづくりの機運が盛り上がると、年商に匹敵する事業資金 140 億円を調達、1993 年の式年遷宮を目標に、自らまちなみ形成の先導的モデル事業として、「おかげ横丁」の建設に入る。具体には、おはらい町のほぼ中央にあった赤福本店前の本社ビル(鉄筋コンクリート造 4 階建)を壊し、その周辺も買収し東西 100m 南北 130m の土地を手当てし、明治初期の下町の賑わいを現出するべく「遊・食・楽」をテーマに、江戸から明治にかけての伊勢路の代表的な建築物を移築したり再現するなどして、今日「おかげ横丁(全 27 棟)」と呼ばれる、物販(土産物屋)や飲食また美術館・資料館 4 館を含む、全 42 店舗からなる和風のまちの建設に入り、1993 年 7 月に完成させる。

この町では伊勢うどん、赤福餅など、この地の名産品や老舗の味を楽しめるだけでなく、この地の歴史や風習また人情までも体験できるよう工夫されている。この横丁の運営管理は、1992 年に赤福が中心となって設立した(有)伊勢福が担っている。この町に入るのに料金を徴収されるわけでない。この町には住民が実際に住み生活をしており、生きた町となっている。おかげ横丁の運営は順調に進み借入金は早期に返済を終え、オープンして 10 年がたった 2002 年、おはらい町として悲願だった観光入込客数 300 万人(2007 年には 400 万人。)を実現する。

濱田氏は、このまちが完成すると、おはらい町全体の活性化をめざし、1994 年に再開発会議を改組し、「伊勢おはらい町会議(和風建築による町並みづくりや季節感あるイベントを開催、将来的には、おはらい町全体を民族博物館とし、日本再生のモデルとしていくことを目標にしている。)」を立ち上げ、まちなみ整備とイベントの実施に力を注ぐ。

### ■式年遷宮 20 年周期

伊勢神宮では 20 年毎に社殿を造り替え、東西の敷地間でご神体を移す、これを式年遷宮という。この行事は 690 年に始まり、これまで 1,300 年以上続いている。社殿は木造なので、その「形」を永久には維持できないことから、「唯一神明造」という「型」をつくり、これにあわせ建替えることで社殿をいつまでも変わらない姿に保とうとする知恵である。ここがギリシアのパルテノン神殿など、「形」自体を残そうとする他国の文化と違うところである。これは「常若」を求める日本人の民族性を表わすとともに、建築技術の継承をも図ろうとしている。なお、旧神殿に用いた建築資材は、「循環」の思想に基づきリサイクルされている。具体には、社殿のあとは宇治橋の前後にある鳥居の柱、その後は伊勢街道入口・七里の渡口と関の追分の鳥居、その次は氏神である春日神社で使われる。こうして伊勢は日本の伝統文化を体現している。

「地方創生」支援プロジェクト





新しい社殿



伊勢神宮新旧社殿



おはらい町



赤福餅

### 3. 老舗商家が先導するまちづくり 界索性創出、江戸を超える

この地は、もともと美観地区に指定されており、まちなみ形成の下地はあったので、その点はわりとスムーズに進んだ。こうしておはらい町では、ほぼ全ての建物が日本瓦葺きによる切妻ないし入母屋造・妻入の屋根と杉板のきざみ囲いの外壁で統一され、今日みるような和風のまちなみ姿を変えた。濱田氏をはじめとする人々の熱い思いが結集し、21世紀を前に、事業開始からわずか10年という短い期間で、伊勢神宮の門前町に相応しい雰囲気が増えることになった。このまちなみ保全修景事業は2009年、市の景観計画へと引き継がれる。この中で内宮おはらい町地区(約6.7ha)は重点地区に位置づけられ、景観地区の指定(2010年)にあわせ高度地区で10mの絶対高さ制限も定められ、景観の維持保全は万全となった。

#### ○おかげ参り 60年周期で大ブーム

この地は庶民の憧れの場所で、人々は伊勢への旅立ちを夢見て、その日が来ることを心待ちにしている。実際、江戸時代には、庶民の伊勢参り(おかげ参り)には何度かブームがあった。

最初のブームは、江戸幕府の統治理念「平和安定」が成った1650年に起こった。この時は江戸商人に始まり約20万人ほどが伊勢へと旅立った。第二次ブームは、世界最大の都市災害・明暦の大火の復興特需を契機に経済が大いに成長、元禄の繁栄がもたらされた後の1705年に起こる。この時は、京の宇治に発し全人口の約13%、350万人を超える人々が伊勢へ参宮した。

第三次ブームは、享保の改革が成り明和の経済隆盛期を迎えた1771年に起こる。この時は全人口の約6~7%、200万人を超える人々が伊勢を訪れた。そして江戸時代最後のブームは、寛政の改革を経て町人文化が隆盛する、文化文政期の1830年に起こる。この時は全人口の約13%、428万人の人々が、伊勢参りに出かけた。

歴史的スパンで伊勢ブームを捉えると、約60年の周期で起きていることがわかる。これは当時の人間の寿命にほぼ匹敵する。しかも、このブームが起きた時期は、政治が安定し平和になった時期、経済発展期、そして文化隆盛期と重なっている。「おかげ参り」の名は、神様の加護や旅すがらの街道筋でのもてなしに対する感謝から、その名がついたといわれている。

#### ○知恵も資金も労力も 熱意と推進力

近代日本に入っても明治末の1905年、政治的安定をみて日本初の団体旅行が始まる。また、

「地方創生」支援プロジェクト



昭和の経済成長がピークを迎えた1970年、国民の間にディスカバー・ジャパンという一大旅行ブームが起こる。この間65年の時が流れている。さて、次の旅行ブームは・・・2033年？

ちなみに、おかげ横丁の完成から20年後の2013年式年遷宮には、濱田益嗣らの奮闘もあり、全人口の約1割**1,300万人の年間参拝者**があり、一大お伊勢ブームが起こった（写真参照）。そうしたこともあり伊勢市は、高度成長期の1970年から今日まで人口は13万人台で安定しており、おはらい町は2015年現在、地価上昇率において三重県内で5年連続トップの座にある。

この地において老舗の商家・赤福は、まちづくりの**コンセプター**であり、また推進組織づくりの**オーガナイザー**でもある。そして先導的事業の**デベロッパー**として、まちづくりを短期（横丁建設）と中長期（まちなみ修復、まち活性化）とに分け主導してきた。その主役・濱田益嗣は、知恵（頭脳）だけでなく多大な資金を投入、また手足も動かし、発想から20年、事業開始から10年で目標とする**伊勢らしさ**を現出、門前町の限界性を創生してしまった。そして2002年には、その実績が認められ国土交通省の**観光カリスマ百選**に選ばれている。

#### 参考資料等

日経産業消費研究所(1999):日経地域情報「まちづくりはブランドづくり」

タウンネット・コム(2003):伊勢神宮の門前町のおはらい町・おかげ横丁を訪ねて

二村宏志(2008):「地域ブランド戦略ハンドブック」ぎょうせい

前田世利子(2010):「こだわりがまちづくりにつながる物語、伊勢・おはらい町」歴史街道

伊勢市ホームページ「内宮おはらいまち、まちなみ保全事業」

伊勢市観光協会ホームページ「おはらいまち」

#### 掲載写真等

位置 <http://www.isejingu.or.jp/access.html>

おはらい町 <http://www.kirari1000.com/>

まちなみ保全地区、建築ファサードデザイン例 <http://www.city.ise.mie.jp/4030.htm>

伊勢神宮 <http://www.kagojinjacho.or.jp/news/post-12.html>

赤福餅 <http://matome.naver.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

